研究所レポート
2013年1月 VOL.44
静岡県教職員組合立教育研究所

東日本大震災から500日
被災地を訪れて

静岡県教職員組合立教育研究所
未来の教育を考える会

大槌町を再訪して

連合第１次「被災者支援ボランティア活動」(2011.3.30～4.8)参加者：H

2011年３月下旬、被災者支援ボランティアとして大槌町に行った。そこにはこれまでに見たこともない町の惨状があった。あれから500日。町はどう再生し始めているのだろうか…。そして、そこに住む人たちは今、どうしているのだろうか。

500日ぶりに訪れた大槌町は、確かにあの時とは変わっていた。町中を覆い尽くしていた「町の残骸」は一掃され、津波により建物としての機能を失い解体撤去を待つ幾つかの建物と家々の基礎部分が残っているだけだった。まだ町の再生の足音すら聞こえない。ここにもう一度町を再生するのかどうかさえ、きっと決められないでいるのだろう。

2011年3月末の大槌町と2012年8月末の大槌町　（遠くに水門が見える）

当時、強く記憶に残った建物がある。４階建ての大槌小学校。津波により３階までの教室が流失し、さらに水浸しの町を襲った大規模な火災により、黒こげになっていた校舎だった。しかし、その建物は驚くほど新しい施設に蘇っていた。大槌町役場の新しい庁舎である。ただ、あくまでここは「仮庁舎」で８月６日から動き始めたばかりだという。町役場があった大槌町の中心部は壊滅し、人口16,000人のうち約１割が津波によって犠牲になった。街はなくなったが、点在する仮設住宅の住人を含め、今でも13,000人が町内に残っている。その人たちのためにも町役場の復旧は急務だったのだろう。

被災直後の大槌小学校　現在は改修され、大槌町役場仮庁舎となっている

ボランティアに実際入った桜木町に向かう。初日にボランティアに入ったＡさん宅。別れ際に泣き崩れていたＡさんがどんな暮らしをしているのか気になった。Ａさん宅の一部は桜木町の簡易郵便局でもあった。当時泥まみれになっていた１階部分はすっかりきれいになり、Ａさんが今でもそこに住み続けていることがわかる。しかし、何回か呼び鈴を鳴らしたがＡさんが出てくることはなかった。郵便局員に聞いてみると、Ａさんは入院していると言う。花火大会を見に行って、腰の骨を折ってしまったという。花火の光、音、振動にフラッシュバックを起こし、体勢を崩したのではないかとのことだった。当時の恐怖感は、きっと時が経ってもぬぐい去ることなどできないのだろう。

次に、家の中の泥出し作業が１日半かかったＢさんのお宅に向かった。しかし、そこには家は存在しなかった。何とか再生しようと思ったのだろうが、やはり１階部分が完全に水に浸かった家は再生できなかったのだろう。住んでいたＢさんの無念さを想像するのは難しくなかった。Ｂさん宅と同様、取り壊された家はそこここに見られた。一度水に浸かった家の再生の難しさ、費用の問題、耐震性の問題、再び襲われるかもしれない地震と津波への恐怖、そして桜木町に住む人々の高齢化の問題。様々な問題が垣間見られた。

桜木町には高齢者が住む平屋も多く、取り壊されてなくなっている家も多く存在した

最後にＣさんのお宅にうかがった。Ｃさんのお宅は当時とは見違えるほどきれいになっていた。高齢ではあるがお元気なＣさんは、一人暮らし。被災後しばらく首都圏に家を構える息子や娘の所に身を寄せていたが、「やはり永年生活してきたここ桜木町に戻りたかった」と話す。修繕を終えた家で、新たな生活を始めていた。「(桜木町に)住み続けることに不安はないか」と聞くと、「震災の時も近所の人と一緒に逃げたから…」と言う。「近所の人と一緒だから…」という言葉は、ボランティアの時にも何度も聞いた。住んでいる人たちのつながりの強さ、まさに絆の強さである。あれだけの災害を乗り越えようとする人々の絆は、きっと震災前よりも強いものになっているのではないだろうか。

町の人の一言が心に残っている。「今年は暑い。…というより、ようやく夏の暑さを感じられるようになったっていう感じかな。去年の夏はまだ暑いなんて言ってる場合でなかったから…」。

この500日がいかに大変だったかを物語る言葉だが、同時に一定の落ち着きを取り戻したことを物語る言葉でもある。大槌町桜木町の再生はこれからである。

豊巻岩手県教組委員長に聞く

東日本大震災500日後の子どもたち・学校

＜家族や肉親の死と向き合うつらさ＞

今回の震災で岩手県内では、小学生は21人、中学生は15人が亡くなりました。学校に避難していた子どもたちは全員助かったのですが、当日欠席した子どもや保護者と一緒に下校する途中の子どもが津波にのまれました。教職員は２人、小中学生の保護者は273人が亡くなりました。

肉親が亡くなったことを認めることができない、肉親の死を受け入れることができない人も多くいます。１年以上経ち、やっと葬式をすることができるようになりましたが、まだ気持ちの整理がつかず葬式を出していない家もあります。家族や肉親を求めて毎月11日に行われる一斉捜索に参加し続けている人もいます。遺族の感情はそういうものだと知りました。

死をどう捉えていいか分からない子どもたちに、教員も、死をどう話していいか分からないということがあります。火事や地震ならそこを探せば何かが残っているわけですが、津波は一切をさらってしまいましたから。一かけらでもいいから(亡くなったという)証拠を見つけたい、それをもって「諦める」という感情の中に子どもたちもいると思います。子どもたちにどう対応するかということは、まさにケースバイケースです。

＜子どもたちへの支援について＞

・支援という善意をめぐる気持ちのズレ

支援を受けたことを忘れてはならないと思います。その上で言います。いろいろなところからいろいろな物が届きました。贈ってくださる方は善意ですが、子どもたちへの指導ということでは考えてしまうこともあります。贈り主から「作文を書いてほしい」ということもありました。現場からは「子どもに作文(礼状)を書かせるのはいかがなものか」という声がありました。電子ピアノが10数台寄付されました。寄付してくれた自治体から「市長や議員が寄付を受けた学校に視察に行くので、音楽の授業をやって欲しい」という依頼もありました。

支援をする方も、「何かできることはありませんか」という善意から出たものですし、支援を通してそこには何らかの交流が生まれます。それは子どもにとって「物」以上に大切なものだと思いますが、それがあまりにもたくさん、いろいろなところからあると、どう受けとめていいのか現場で整理しきれないこともありました。また、被災地の教員からは、子どもたちがものを貰ったり、サービスを受けたりすることに慣れてしまうことが怖いと語られました。

・自立を助ける支援を

支援のかたちは相手によって色々ですし、相手が何を要求しているのか、どう自立していくのかということをきちんと見極めながらの支援が必要だと思います。被災地支援は“ちょっとお手伝いして自立を助ける”といった方向でやってほしいと思います。

震災直後は水がなかった。紙もなかった。学習道具もなかった。だから物が届けられたのは本当に助かりました。おかげで日常の学習活動を取り戻すことができました。しかし、今はどっとノートや鉛筆が届けられたりしたら「えっ」と思ってしまいます。

被災地に本が届けられました。被災地の本屋さんは何とか仮店舗をつくって商売を再開しようとしています。そこに支援物資の本が溢れたら…。「本よりも図書カードなどを送っていただいた方が現地は助かるのに…」と思いました。どのタイミングで、何を支援するかということは、現地の要求に沿ったものでないと、善意が善意として届かないこともあるということを経験しました。

＊2012年７月27日、豊巻岩手県教組委員長からお聞きした話の一部です。詳しい内容は「研究所ホームページ」に掲載してあります。

高校の火事の記憶

共同研究者：K

小学生だった(と思う)。半鐘とサイレンで目を覚まし、促されて外に出た。100m先で、高校の木造校舎が燃えていた。大きな建物が、さらに巨大な炎に包まれていて、高い街路樹のある道を隔てていても熱気が渡ってきた。思えば、これが私の経験した「災害」の原点である。その記憶は遠く連綿と続き、今に至るまで消えない。

しかし、この高校はもちろん私の通学していた学校ではなかった。その木造校舎には、多分理科教室や技術科教室があり、その窓の下を探りながら歩くと、三角定規とか何に使うのか不明な文房具らしいものが落ちていた。そこで私は、やがて入学するはずの高校で、未来の生活を少し覗くことができたのだった。

学校という存在

子どもの生活は、大人のそれに比べれば比較的単純かもしれない。現象学的社会学では、私たちは多様な意味世界を渡り歩きながら生きると説く。科学、遊び、空想、宗教などは、それぞれ越えるたびに多かれ少なかれショックを受けるような別の世界なのである。これらの世界のうち、子どもが住むもっとも重要な社会的現実、すなわちこの学派の言うところの「至高の現実」にあたるのは、社会と学校だろう。前者は子どもの現実の基盤であり、子どもたちはそこから越境して別の世界に冒険に出かける。後者は子どもにとって家庭の次に重要な世界である。校門をくぐるとき、子どもは別の世界に自らを投企する。学校は未来に続く道である。いつか出ていくその先に、新しい自分を見出す。私にとって燃えている高校は、まさに未来への既定の通路だったのだ。

現実感覚の崩壊・方向感覚の喪失

震災の爪痕を1年4ヶ月を経て再び訪ねた。陸前高田市の「奇跡の一本松」に湾を隔てて向かい合う気仙中学校は、津波に飲み込まれた姿をまださらしていた。子どもたちは、この校舎が津波に飲み込まれた光景を見たのだろうか。それは現実の生活が奪われるというだけの情景ではない。その生活の先にある未来を喪失する体験なのだ。

グラウンドの入り口の校舎に向かい合う地点に伝言板があった。生徒たちが、「気中ありがとう」「忘れない」と書き残している。教室の窓からは対岸の緑連なる高田松原や外海へと広がる青い湾の入り口が見渡せたはずだ。私たちは、わずかに1本だけ残った「奇跡の一本松」を見た。通学していた学校を失うのは、未来を奪われる体験であったろう。彼らはこの大災害で一生が変わったことを知っている。

子どもの記憶に残るもの

子どもにとっての社会的現実が多様化した現在でも、学校は家庭とならぶ最も重要な現実だ。子どもはそこで多様な価値観を学び、その学びを背景に様々な意味世界に入ってゆく。通学校の被災は、その意味でも生きる基盤を失う体験である。子どもたちが復興のプロセスを体験することは、彼ら自身が再び生き始めるその道だと思う。

実家の前の高校はすぐに再建され、やがて私の母校になった。帰省するたびに、今は建て替えられて3代目となった鉄筋コンクリートの校舎を眺め、生徒たちの姿を見るが、その軒下はもう歩かない。そこに私の未来はもうないけれども、私を形作ったものの記憶は蘇る。

東日本大震災の被災地を訪問して

共同研究者：Ｉ

死者16,019人、行方不明3,805人、全壊建物118,621戸、半壊建物181,801戸、一部破損建物621,013。これは2012年10月現在の東日本大震災の被害データの一部である。この数値を見ただけで、今回の震災の大きさがよく分かる。本年８月に被災地を訪れるまでは、こうした数値、レポート、画像などで被害の大きさと残酷さを理解していた。

被災地を訪問して、このような理解の狭さを痛切に感じた。もちろん、すべての人が被災地に行けるわけでもないから、数値、レポート、画像などで被害の実態を捉えることはとても大切なことである。わたしが数値などによる理解の狭さを感じたのは、次のような「発見」をしたからだ。

岩手県大槌町。被災地にボランティアとしていち早く入ったＨ先生のガイドがなければ、一面広大な更地になっている場所に、かつて街があったということを想像できなかったろう。更地になっている街を歩いてみると、被災した家屋の土台部分を多数見ることができた。近づいてみると、風呂場があった場所を確認できた。部分的にタイル、焼けこげたシャワーの配管がそこにはあった。当たり前のことだが「ここで人が生活をしていたんだ」ということが実感できた。この風呂場では毎日、家族が一日の疲れを癒したり、子どもたちが大騒ぎをしながら入浴したりしていたのかもしれない。そんなことが想像できた。これがわたしの些細な「発見」である。

この「発見」を通して、わたしは数値で示される被害の限界を感じた。亡くなった16,019人の方々。数値で表せばある種のマスでしかない。しかし、それはかけがえのない個性的な人生と生活が16,019人分、この地上から消えたことを意味している。数値は便利だが「個性的なものの喪失」をうまく表現できない。

被害の状況も訪れた地域ごとにまったく違う。大槌町や陸前高田市のように津波によって街が亡くなった所、気仙沼市のように確実に復興の動きを感じさせる所、そして、飯舘村のように家屋被害は少なくても放射能の被害で人っ子一人いない所。被害のありようもまた「個的」なのである。

復興のための公共政策の多くは巨視的な観点に立ってすすめられる。しかし、私たちは失われた「個的なもの」への想像力を失ってはいけない。親を失った子どもたち、友だちを亡くした子どもたち、子を亡くした親たち、それぞれ直面している苦境は一人一人みな違うはずだ。

東日本大震災のことは徐々に私たちの日常から消え始めている。復興がすすんだとしても失われた「個的なもの」は戻らない。この残酷な事実を私たちは忘れてはならないだろう。そして「個的なもの」の尊重は、復興対策に必要な観点だけでなく、日本全体が直面している課題でもある。

草原（くさはら）が訴えていること

教育研究所：Ｉ

「実際に被災地を見たら、どんな思いをもつだろうか」そんなことを考えながら、この旅をスタートした。被災したままの建物、いまだ山積みされている「がれき」、力強く立っていた一本松…など、一部の地域だったが自分の目で見て回った。希望、悲しさ、恐ろしさ…など、一言では言い表すことができない思いがこみ上げてきた。その中でも一番印象深かったのは、各地で見た緑深い「草原（くさはら）」だった。

津波の被害がなかった内陸部で

辺り一面広がる田んぼでは、稲が青々と育っていた。人々の生活が震災後も変わらずに続いている証しであり、自然も人も生きている力強さが感じられた。

岩手県大槌町で

一面に草原が広がっていた。よく見ると草原の中には建物の土台が残っており、震災までは住宅が密集していたことを知った。高い草丈が、長いあいだ何も手が付けられていないことを語っていた。しかし、一方でダンプカーが頻繁に行き来し、工事車輌の音が鳴り響いていた。復興に向けて少しずつ前進している様子も見ることができた。

福島県南相馬市で

大槌町とまったく違った光景が見られた。震災当時のまま壊れた建物が残っており、その周囲には草が生いしげっていた。人のまったくいない集落は時間が止まってしまったかのようにとても静かで怖かった。途中立ち寄った小学校は、どこも壊れた所が見あたらず、子どもたちの声が聞こえてきてもおかしくないのに、運動場は草原になって、ひっそりとしていた。

校舎はあるのに人がいなくて学校が再開できない。改めて、目に見えない放射能の恐ろしさを感じた。

「3.11の震災のことは絶対に忘れてはいけない」との思いから、テレビや新聞等で震災関連のニュースをできるだけ見るように務めてきた。だから、被災地の現状を少しは知っているつもりでいた。しかし、今回の旅で「私が知っている被災地のことは、ほんの少しだった」ことを思い知った。

復興中の地域、復興ができない地域……私にできることは何だろう。

大槌町の学校のこと

教育研究所：S

大槌町は大槌湾と船越湾に面した2つの地区に分かれ、町のほとんどは山で海岸近くの平地に集落が広がっている。船越湾に面した吉里吉里地区には小学校と中学校が一つずつあるが、高台にあったため被害を免れた。南の大槌湾(「ひょっこりひょうたん島」のモデルになった蓬莱島がある)に面した大槌地区には、大槌中と大槌小(児童数196人)、大槌北小(186人)、赤浜小(18人)、安渡小(34人)の4つの小学校がある。すべて津波の被害を受けた。

現在、5つの学校は町の中心から離れている総合運動公園に建てられたプレハブ校舎に入っている。駐車場には各方面から通学するためのスクールバスが何台も止まっている。

運動場では1年生が体育の学習で縄跳びをやっていた。「すごいね！」という励ましの声、それに応える子どもたちの喚声が聞こえる。そこだけを見ると普段と変わりない楽しそうな学校生活の一場面がある。

この子どもたちに、震災前に当たり前にあった楽しい学校生活が戻るには、あとどれだけの時間が経てばいいのだろうか…。一日も早く、と思う。

2012年8月24･25日、連合第1次「被災者支援ボランティア活動」に参加したHさんを先達にして、東日本大震災の被災地を訪ねた。大槌町から釜石市、陸前高田市、気仙沼市と三陸海岸を南に下った。２日目は仙台空港から仙台平野を南に向かった。福島第１原子力発電所までおよそ20キロ、南相馬市（旧小高町）内で国道６号は厳重に閉鎖されていた。そこから引き返し、全村民が避難中の飯舘村を通り帰路についた。

表紙の写真のように被災地の復旧・復興は始まったばかりであり、地域によりその状況に差があること、破壊し尽くされたインフラの整備など被災者の方たちの「絆」ではどうすることもできない大きな課題がほとんど手つかずの状況であることなどを見た。紙幅の関係で限られたものになるが、震災後500日を経た被災地の様子について報告する。

今回、被災地を訪ねるにあたり、岩手県教職員組合から様々な情報の提供をいただいた。また、豊巻委員長からはご多用の折にもかかわらず岩手県の学校と子どもたちのことについて、丁寧なお話しをいただいた。

静岡県教職員組合立教育研究所「未来の教育を考える会」

最後までお読みいただきありがとうございました。この所報をお読みになったご意見･ご感想をお聞かせください。皆さんからいただいたご意見･ご感想は、今後の研究活動や成果発信に生かします。

STU Institute of Educational Research
静岡県教職員組合立教育研究所
FAX：054-255-5110
Mail：sier@stu.or.jp（ご意見専用研究所メールアドレス）

財団法人 静岡県教職員互助組合
静岡県教職員生活協同組合
静岡県学校生活協同組合連合会
社団法人 静岡県出版文化会
静岡県教育事業団体連絡会 教育と生活をサポート
公益財団法人 日本教育公務員弘済会静岡支部
株式会社 静岡教育出版社
KOKUSAI 国際観光株式会社
静岡県住宅建設工業株式会社